

ライフストーリーワークにおける就職前の事前学習の意義

Significance of learning about “Life Story Work” before starting one’s career

才村 真理*

Mari Saimura

Life Story Work(LSW) is a method in which children in care, with reliable workers, can learn about their origins, including the history of their biological parents and the reasons why they were separated from them. While implementing LSW training to carers at children’s homes, I realized that the prior learning of the philosophy and methodology of LSW will allow carers to provide high-quality LSW practice soon after starting their career.

In this study, I conducted a questionnaire to carers and students, and did a qualitative analysis on their answers to open-ended questions. The results revealed that learning about LSW before starting one’s career has significance in the following points: understanding the reality of children in care, LSW’s philosophy, need and practice; and providing opportunities for LSW learners to know themselves. While the following concerns were also revealed: treatment of personal information; and limitation and careful selection of targeted learners.

はじめに

ライフストーリーワーク (LSW) とは、社会的養護 (施設入所や里親委託、養子縁組) の子どもたちに、誰から生まれ、なぜ親から分離されたのか、これまでどんな生い立ちだったのかなどについて、信頼できる大人と共に時間をかけて整理していく方法である。筆者は、児童福祉施設や児童相談所職員に対してLSWの研修を実施する中で、就職前の事前学習としてLSWを大学生や大学院生のカリキュラムに組み込むことができないかについて考えてきた。その理由は、就職後子どもの養育に慣れてから初めて取り組むのでは遅いのではないかと、学生時代にその視点を持つなど啓発する必要性を感じており、事前学習を行うことにより、児童福祉現場で質の高いLSWを確保できるのではと考えた。そのためこの研究では、就職前の事前学習として大学(院)でLSWについての授業を行うことについて、すでに仕事についている児童福祉現場職員と就職前の大学(院)生が、どのように思うのかについて明らかにし、LSWにおける就職前の事前学習の意義について考察するものである。

1 LSW とは

LSWとは、Ryan & Walker (1993) によると、社会的養護の子ども (筆者注: 英国では里親委託や養子縁組した子どもが多いが、日本では施設で暮らす子どもが多い) に対するソーシャルワーク実践の一部であり、LSWの過程の中で、なぜ自分が生まれた家族と共に暮らせず分離されたのか、生まれた家族についての詳細、分離される前の生活情報、どこで生まれたのか、生まれた家族とコンタクトを取ることができるのか、などの疑問に答えることができるとしている。才村ら (2016) は、「子どもの日々の生活やさまざまな思いに光を当て、自分は自分であって

* 帝塚山大学教育学部 非常勤講師

いということを確認すること、自分の生き立ちや家族との関係を整理し、過去－現在－未来をつなぎ、前向きに生きていけるよう支援する取組みが、LSWである」とし、LSWには、①日常的に行うLSW ②セッション型LSW ③セラピューティック（治療的）なLSWの3段階の方法が存在する。①は子どもが日常場面で「いつまでここで暮らすの？」などの疑問を出した際に丁寧にその気持ちを受け止め、②に繋ぐことであり、日ごろの子どもにまつわる状況や出来事を丁寧に記録しておくことである。②は信頼できる大人と、日常の場面から離れた場所でLSWをセッションの形で実施することである。③はセラピィと連動しながらLSWを実施することであるが、日本ではまだその体制が整っていないとされている。LSWという概念そのものが現在十分に日本で浸透しているとは言えず、生き立ちの整理の実践という言葉で説明されることも多い。その理念や必要性は認識されつつあるが、実践方法については一つのパッケージ提供ではなく、その子どもに適した方法が模索されるものであり、質の高い実践が望まれている。

2 LSWの普及と本研究の目的

日本におけるLSWの普及は、山本ら（2015）によると、曾田里美（2013）が行った「ライフストーリーワーク実践に関する実態調査」で報告された、児童養護施設と児童相談所に対する全数調査結果では、主体的に実施している児童養護施設は22.7%、児童相談所は16.3%であり、一度も実施したことがない児童養護施設は41.3%、児童相談所は61.6%であった。次に、才村（2016）によると、みずほ情報総研（株）の調査（2015.12-2016.1実施）では、社会的養護関係施設における目標別に見たプログラムであるLSW（生き立ち整理）を実施している施設数の割合をみると、児童養護施設では目標A（家庭復帰できる）児童へ25.3%、目標B（一定の距離をとって親子交流を続ける）児童へ34.8%、目標C（親子交流が望ましくない、または、親子の交流がない）児童へ39.6%の施設が実施となっており、先の報告よりもLSWの実施が増加している。

LSWは徐々に日本各地域に広がりつつあり、各地で現場職員への研修会が実施されているが、筆者はLSWについて、就職前の事前学習、ここでは、大学（院）教育に取り入れることが出来ないかと考えた。その理由は、就職後子どものケアに慣れた後、取り組むよりも、学生時代にLSWの考え方や実践方法について触れておくと、早期にLSWの実施が可能となることが期待される。現場でより質の高いLSW実践を可能にするためにも、事前学習が有効ではないかと考えた。そうすることにより、多くの子どもたちの自尊心が回復することを期待したい。実際に児童福祉現場にすでに就職している職員と大学（院）生は、この提案をどのように受け止めるのだろうか、アンケート調査の自由記述をまとめ、考察することを本研究の目的とした。

3 研究目的と方法

アンケート調査研究の目的・方法は、以下の通りである。

3-1 目的 LSWにおける就職前の事前学習として、大学（院）教育に取り入れることの意義について明らかにする

3-2 方法 筆者が、LSWについて、大学（院）では講義、施設では研修を実施した。大学での講義の内容は、大学では90分、大学院では120分の授業で、LSWの理念、法的根拠、必要性、実施方法、社会的養護の子どもの状況、架空事例の紹介、自分を知るワーク、事実と感情のワーク（LSWの実施者に求められるのは、自分について知っておくこと、事実と感情を扱えることなどがあるため）などを講義と演習形式で行った。施設での研修は、大学での授業とほぼ同じであるが、180分の研修の中で、架空事例の計画会議の実施など、実際の場面で使える演習も取り入

れた。それぞれ、講義および研修の終了後に研究の趣旨を文書および口頭で説明し、賛同が得られた受講者にアンケートを配布し、記入後に大学院では回収箱、大学及び施設では封筒に入れてもらい回収した。なお、この研究は武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科研究倫理審査を受け、2016年9月29日に承認されている。

回収したアンケートの設問1から5の結果は、次の‘4 アンケートの結果’の通りであったが、設問4 [大学(院)教育にLSWを取り入れることについて、どう思いますか] の回答(自由記述)については、帰納法で質的分析を行った。質的分析の方法としては、定性的コーディング(村社 2011)(橋本 2016)を使用した。つまり、最初に自由記述の回答記録データから、意味ごとに「コード」を割り出す作業、次に「コード」から「カテゴリー」を、そして「説明図式(理論)」へと統合する作業を行った。これらの作業において、最初に出た結果を繰り返し見直して修正を行い、これ以上修正できないところまで作業を繰り返していき、分析した。なお「就職前の事前学習」はさまざまところで可能であるが、ここでは大学(院)教育と限定した。

3-3 アンケート実施時期 2016.9～2016.11

3-4 アンケート質問項目 大学(院)生用は、設問1 [あなたの職業は? 大学生・大学院生・その他]、設問2 [将来、社会的養護の現場で働く可能性は? 大いにある・ある・あまりない・その他]、設問3 [子どもの知る権利についてどう思いますか? 実親が反対しても知らせるべき・実親に同意を得て(実親と連絡が取れない場合は実親の意向は関係なく)できるだけ子どもにまつわる事実を知らせるべき・子どもへ知らせる事実については慎重にしなければならない・その他]、前記の設問4、設問5 [本日の講義内容についてのご意見など何でもお書きください] で構成されていた。設問1-3は選択方式、設問4・5は自由記述方式とした。

児童福祉現場職員用は、設問1の回答を [保育士・児童指導員・児童福祉司・児童心理司・里親・その他] に変更し、設問2を [あなたの児童福祉分野での経験年数は? 1年未満・1-5年未満・5-10年未満・10年以上・経験なし] とした点が異なっていた。

4 アンケートの結果

設問1の結果として、アンケートの有効回答数は合計78人であり、内訳は学生43人、院生10人、児童指導員6人、保育士11人、施設心理士2人、児童福祉施設職員のその他6人であった。また、設問4の回答者(自由記述)の内訳は、学生33人、院生10人、児童指導員6人、保育士10人、施設心理士2人、児童福祉施設職員のその他6人であった。設問2及び4への自由記述を含む回答を集計した結果がTable 1、Table 2(後記)である。なお、設問3及び5については、本研究と関連がないので省略する。

5 考察：自由記述の回答を中心に

設問4 [大学(院)教育にLSWを取り入れることについて、どう思いますか?] への自由記述回答を分析した結果から明らかになったカテゴリー、コードおよびデータについてはTable 3-1、Table 3-2(後記)に整理した。さらに生成されたカテゴリー間の説明図式をFigure 1(後記)として作成した。アンケートの自由記述内容の記録データは、学生< >、院生『 』、現場職員「 」で示した。また、以下の文では、生成されたカテゴリーは下線、コードについては【 】で示した。

5-1 大学(院)教育にLSWを取り入れることについて

分析結果により、大学(院)教育にLSWを取り入れることの意義として、社会的養護の実態

を知る、LSWの理念・概念を知る、LSWの必要性を知る、LSW実践方法を理解する、LSWの実践の意味を知る、学生の自己覚知ができる（筆者注；自己覚知とは自分がどんな人間か知ること）がカテゴリーとして抽出された。一方、懸念として、個人情報の取り扱い、受講対象者を限定すべき、慎重さが必要、効果への疑問がカテゴリーとして抽出された。以下にその詳細をみていく。

5-2 大学（院）教育にLSWを取り入れることの意義

大学（院）教育にLSWを取り入れることの意義として、以下のカテゴリーが抽出された。

社会的養護の実態を知るでは、大学（院）教育にLSWを取り入れることにより、社会的養護児童の【生い立ちを知る】、【社会的養護の現場を知る機会となる】、【入所児童について知る機会となる】のコードに分類された。LSWの理念・概念を知るでは、「現場に入る前にLSWについて学ぶ機会があるのはいい」などの【LSWの知識の必要性】や更に【知識の上に経験を】など知識・経験の両方が必要なこと、子どもが【自己肯定感を持つ】ことや、子どもに【知る権利】があるという理念を知るコードが出された。LSWの必要性を知るでは、LSWの【価値】がわかること、【学生時代の方がゆっくり時間かけて勉強できる】こと、「LSWが当たり前ものとして社会全体に認知され、子どもたちに還元されるという、よいサイクルになれば」などの【社会に認知されるきっかけ】、「全員に必要なことだ」などの【何人にも必要】、【対人援助職には必要】のコードに分類された。LSW実践方法を理解するでは、<過去のことを知ることは伝え方を間違えると逆効果となってしまうと思うので、より多くの人が正しい知識をつけるために良い>などの【不安定な枠での実施の回避】、LSWは、多数のかかわり方や、多様なかかわり方があることを学ぶ必要があるとした【かかわり方】、【具体的な支援のイメージ】ができること、【心のケアでも必要】、【ケースワーク上の重要性】のコードに分類された。LSWの実践の意味を知るでは、LSWの実施により子どもが【自分を受け入れる】ことができることを知る、<知りたい人には教えてあげた方がいい>などの【LSWの対象者】について知る、LSWの実施により【もやもやをなくす】こと、「LSWの勉強をして、する前と勉強した後で、子どものかかわり方が変わった」などの【子どもへのかかわり方の変化】のコードに分類された。学生の自己覚知ができるでは、【自我の発達してきた時期】が大学生だからLSWの授業が受け入れられる、授業の中で【自分の過去の振り返り】ができる、子どもの【感情がわかる】、「自分自身のライフストーリーブックを作るというのもよい」などの【ワークをする】、LSWを授業に取り入れる【方法の工夫】のコードに分類された。

5-3 大学（院）教育にLSWを取り入れることの懸念

大学（院）教育にLSWを取り入れることの懸念として、以下のカテゴリーが抽出された。

個人情報の取り扱いでは、『長期的な授業で取り入れると、名前を伏せて、匿名の授業であっても、大切な個人情報であるため、雑に扱われかねない』などの【個人情報が雑にならないか】という懸念、受講対象者を限定すべきでは、【将来の進路が決まっていなくて安易な取り組みになる】懸念や<反対の人もいると思うので、授業に取り入れるというよりは、学内希望者対象にするべきだ>などの【受講対象者の限定が必要】のコードに分類された。慎重さが必要では、【過去に触れたくない人やストレスを感じる人がいる】のコード、効果への疑問では、子どもがLSWを行い、【前向きになれるのか疑問】のコードに分類された。

5-4 図式化とその考察

‘大学（院）教育にLSWを取り入れる意義と懸念’についてFigure 1として図式化した。意義として、大学（院）教育にLSWを取り入れると、次の順に学生（院生）は学んでいけるのでは

ないかと考えられる。社会的養護の実態を知る→LSWの理念・概念を知る→LSWの必要性を知る→LSW実践方法を理解する・LSW実践の意味を知る→学生（院生）の自己覚知ができる 図式では下から上へという流れである。この流れは、LSWを理解する上での一般的な理解からより専門的な内容へと進む方向であり、最後の自己覚知はLSWの実施者としてのトレーニング内容となっており、LSWの理念や必要性、実施方法などを理解した上で取り組むべき内容であるため最上部に位置させた。また、意義についての回答数より少数ではあるが、個人情報の取り扱い、受講対象者を限定すべき、慎重さが必要、効果への疑問の懸念が出され、大学（院）教育にLSWを取り入れるならば、こう言った懸念を払拭できるよう、LSWを授業に取り入れる中身の吟味と受講する学生への配慮が欠かせないと思われる。例として、授業毎に個人情報の取扱いに細心の注意を払うこと、秘密を守ることを約束する、自己覚知のワークなどやりたくない人はやらなくて良いと説明するなどである。

5-5 回答者の属性との関連

まず、学生の属性については、Table2の通り、設問4の回答の記述者について、全体が67人中、学生33人、院生10人、施設職員24人であり、学生がほぼ半数を占めている。しかし、自由記述の総文字数を調べると、学生1,724文字、院生1,340文字、施設職員2,626文字であり、必ずしも学生の記述量は多くない。また、Table3-2をみると、「LSWを取り入れることの懸念」に関する16の記述のうち、半数以上の9が学生の回答であった。そして、Table1-1をみると、設問4の回答の記述ありについては、学生の33人中28人が、将来社会的養護の現場で働く可能性について「あまりない」「ない」としており、将来、社会的養護の現場で働くことを考えていない者による回答となっている。これらのことからLSWを授業に取り入れることへの懸念が多いという結果になっているのではないかと推測できる。現実には、保育士養成系大学の学科であっても、社会的養護の現場に就職しようとする学生は少数であり、学生の将来の就職先として社会的養護の現場を希望する学生の多い学科においてLSWの授業をすること自体が不可能なことではないかと考えられる。このため、将来、社会的養護の現場へ就職する希望者が少ない学生集団に、事前学習としてLSWを取り入れることが想定されるが、その場合、意義はさまざまあるが、出てきた懸念に対しても吟味する必要性はあるだろう。

一方、院生については、Table1-1より、将来社会的養護の現場で働く可能性が「大いにある」「ある」が10人中8人であり、大半の院生が就職先として考慮している。自由記述回答の文字数も一人平均134文字であり、学生52文字、施設職員109文字よりも多く、LSWへの関心が高い院生が回答したものといえよう。

施設職員については、経験年数はTable1-2より、比較的長い（児童福祉分野での経験5年以上が、設問4の回答記述者24人中15人である）職員の自由記述回答となっており、LSWをテーマとした研修を企画する施設であったことから、LSWに関心の高い施設職員の回答であったといえる。

6 まとめ

LSWにおける就職前の事前学習の意義について、以下のことが導き出された。大学（院）教育にLSWを取り入れると、学生（院生）が社会的養護の実態を知ることができ、LSWの理念や概念を知り、LSWの必要性についても知ることができる。さらに、LSW実践方法を理解し、実践の意味を知ることができ、それらを理解したうえでトレーニングとしての学生自身の自己覚知ができる（自分について知ることができる）ことが、意義として出された。しかし、LSWを大

学（院）教育に取り入れる際には、個人情報取り扱いに注意し、受講対象者を限定することも考えた方がよい、また、過去に触れたくない人やストレスを感じる人がいることも考慮して、慎重に行うことが必要であることが導き出された。また、そもそもLSWの効果が本当にあるのかという疑問を持つ人もいることも念頭において、大学（院）教育への取り入れを考慮しなければならないことがわかった。

7 本研究の限界

本研究は、78人という少人数のアンケート調査であり、設問4に自由記述した対象者は67人と少ない。しかも、学生、院生、施設職員の人数のバランスは取れていない。児童福祉の現場に就職する前の学生と、すでに就職している職員の自由記述内容を一緒にして表にし、発言者を『 』「 」〈 〉で分けることでのみ区別している。また、将来、社会的養護の現場で働く可能性の人数にも偏りが見られ、均等な集団とは言えない対象者の自由記述の回答内容を分析した結果である。そのため、結果は偏りがあると言わざるを得ない。しかし、LSWそのものが、まだ周知されていない現状では、大学（院）教育に取り込むという試み自体がチャレンジである。このアンケートもそのチャレンジへの感想という意味合いが強い。この分析結果により、LSWにおける大学（院）教育での事前学習はさまざまな意義が見出されたが、良いことだから進めようという論理だけでは不十分で、その方法や受講対象者の選定など、今後、大学（院）教育に組み込む機会がある場合、慎重に進めていく必要があるという、一つの視点を投げかけたのではないと思われる。

8 謝辞

本研究は武庫川女子大学 佐方哲彦教授に、調査研究の共同研究者として、また、倫理申請及びその許可について、多大なご尽力をいただきました。また、この論文の投稿について、単著で提出の許可もいただきました。ここに深謝いたします。そして、調査にご協力賜りました、児童福祉施設職員の方々、大学生、大学院生の方々に、深く感謝いたします。

引用文献

- Ryan, Tony and Walker, Rodger *“Life Story Work: A practical guide to helping children understand their past”* British Association for Adoption & Fostering. Russel Press.4-9,1993
- 才村眞理・大阪ライフストーリー研究会編 『今から学ぼう！ライフストーリーワークー施設や里親宅で暮らす子どもたちと行う実践マニュアル』福村出版、8-11、2016年
- 山本智佳央・榎原真也・徳永祥子・平田修三編 『ライフストーリーワーク入門ー社会的養護への導入・展開がわかる実践ガイド』明石書店、14-15、2015年
- 才村眞理「福祉領域におけるライフストーリーワーク実践の現状」『子どもの虐待とネグレクト』18 (3)、295-300、2016年
- 村社 卓「介護保険制度下でのケアマネジメント実践モデルに関する研究」『社会福祉学』52 (1)、55-68、2011年
- 橋本 力「介護支援専門員と家族との協力関係」『社会福祉学』57 (1)、42-57、2016年

Table1 設問2への回答 [それぞれ設問4の記述ありの人数を()とした]

Table 1-1 将来社会的養護の現場で働く可能性(学生・院生)

(人)

選 択 肢	大いにある	ある	あまりない	ない	その他	計
学 生	1 (1)	5 (2)	22 (20)	13 (8)	2 (2)	43 (33)
院 生	2 (2)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	10 (10)

Table 1-2 児童福祉分野での経験年数(児童養護施設職員)

(人)

選 択 肢	1年未満	5年未満	10年未満	10年以上	経験なし	計
施設職員	3 (2)	7 (7)	7 (5)	10 (10)	0 (0)	25 (24)

Table2 設問4 [大学(院)教育にLSWを取り入れることについて、どう思いますか?]への回答者数・記述あり及び記述なしの回答者数・自由記述の文字数

	回 答 者	記述あり	記述なし	総文字数	一人当たりの平均文字数
学 生	43人	33人	10人	1,724文字	52文字
院 生	10	10	0	1,340	134
施設職員	25	24	1	2,626	109
計	78	67	11	5,690	85

Table3-1 大学(院)教育にLSWを取り入れることの意義

カテゴリー	コ ー ド	データの一部 学生< >、院生「 」、現場職員「 」
社会的養護の実態を知る	生い立ちを知る	『つらい過去を持っている子どもたちが自分の過去を知ってそんな自分を受け入れていくことは、大人になる上で大切なこと』『自分の生い立ちについてどのような体験をしているのか、また、していくべきなのか、よく理解できました』
	社会的養護の現場を知る機会となる	『社会的養護の現場についても知る機会にもなる』『なぜ必要か?という背景も併せて知ること、社会的養護の理解が深まる』<施設のことを知らない人もいる>
	入所児童について知る機会となる	『施設に入所している児童についても知る機会になる』<施設などにいる子どもたちの気持ちをわかるためにも、取り入れた方がいい><自分とは違う環境で育ってきた人の感情を知ることができる>『そのような子供たちを知るといって面々勉強できる』
LSWの理念・概念を知る	LSWの知識の必要性	『現場に入る前に、LSWについて学ぶ(知る)機会があるのはいい』『そのような知識は社会的養護に携わる上で必要だ』『初めてLSWのことを聞いて、何のことかわからなかったため、知識が広がるので良い』『LSWを知ってもらうためには必要』『LSWというものがどういったことかは知っておくと良い』<学生が学ぶ必要はあると思う。知らないことが多く、知っていないといけない知識だと思う><自分自身も知らなかったし、認知度を高めるためにも取り入れるべき>
	知識の上に経験を	『知識があった上に経験を重ねていけるのは良い』『専門知識を持つことは実践するに当たり必要だ』
	自己肯定感を持つ	『現在、過去、未来をつなぎ、自分の存在意義や自己肯定感を持つためのもの』<前向きに生きるきっかけになる><生い立ちを知ることで前に進むのはいい方法だ>
	知る権利	『子どもたちには知る権利がある』『‘子どもの知る権利’についてLSWという視点で、学生の方が学ぶのも一つか』<子どもにも知る権利が必要だ><児童の権利について考える機会>
LSWの必要性を知る	価値	『子ども自身に過去の諸々の事情を伝えることが良いことなのか悪いことなのか、慎重に考えていかなければならないためにも、教育機関で取り入れていく必要がある』『LSWの視点を持つことによって、子どもにとって良い効果が生まれるのではないか』
	学生時代の方がゆっくり時間かけて勉強できる	『学生時代、ゆっくり時間をかけて勉強できる時に、基本的な考えを知っておいた方が、実践しながら身につけるよりも十分に理解できる』<じっくり学びたい>

LSWの必要性を知る	社会に認知されるきっかけ	「まったく関係のない分野に行く人にとっても社会に認知されるきっかけにつながる」「LSWが当たり前のものとして社会全体に認知され、子どもたちに還元されるという、よいサイクルになれば」「LSWをすることは、まだ‘当たり前’ではないが、大学教育で学んでいればもっと‘当たり前’に近づき、必要なことだという意識が広がる」
	何人にも必要	「全員に必要なことだ」「何人にも必要性を感じます」<誰もがなぜ自分は生まれてきたのか、望まれて生まれてきたのかと疑問に思うことだと思うので、LSWをすることで少しでも解決することができる>「入所の児童に対し、当たり前前にできる環境を整える為、まずは学生から把握することは必要」<大学教育よりも高校教育に取り入れた方がよい>「過去と現在の自分を知り、未来の自分につなげていく営みは、施設に入所している子どものみならず、すべての人にとって大切なことだ」「概念については、どなたも知る（勉強する）機会があるのであれば、知るべき」
	対人援助職には必要	「人と接する仕事に就こうと思っている人には必要だ」「たとえさわりの部分、入門だけでも、特に対人援助の職をめざそうとする学生に対してはプログラムとして取り入れることは大きな意味がある」「社会的養護に関する専門課程においては、基礎的な部分を導入することは有用だ」「将来、それらの現場で働く可能性のある私達のような学生は、LSWがどのようなものかを知っておく必要がある」「働く可能性があるのであれば、LSWについて何らかの知識を持っておくべきだ」
	現場実習に役立つ	「現場実習に行った時にもとても役立つ」
LSW実践方法を理解する	不安定な枠での実施の回避	「LSWは良いらしいとぼんやりとした認識で不安定な枠のもと、実施してしまうことがないようにすれば良い」<過去のことを知ることは伝え方を間違えると逆効果になってしまうと思うので、より多くの方が正しい知識をつけるために良い>「タイミング等はきちんと考えないといけない」
	かかわり方	「多数のかかわり方の手法の一つ、選択肢の一つとして、LSWを入れることは良い」「かかわり方に1つの正解、不正解があるわけではなく、多様なかかわりがあることを学ぶ」
	具体的な支援のイメージ	「いざ現場に入ったときに柔軟な対応をしやすくなるかもしれない」「より具体的な支援がイメージでき、学生の知識や視野も広がる」「子どもたちとの関わり方がより分かるように思います。(家族の話の扱い方など)」「知識を持ったうえで、子どもたちとかかわることで、こういった視点を持てばいいのか、など心がまえもできる」
	心理のケアでも必要	<心理の中でもケアするために必要だ>
	ケースワーク上の重要性	「児童福祉の現場でケースワークをする上で、非常に大事だ」
LSW実践の意味を知る	自分を受け入れる	「LSWは子どもが‘信頼できる大人’と‘時間をかけて丁寧に’自分のライフストーリーを知るからこそ、自分を受け入れることができるということを知る人間が現場にいることには、大きな意味がある」「慎重であることは大前提ですが、実親に妥当な判断能力があるとは限らないので、同意を得られない場合でも、必要ならば、LSWとして子どもたちが理不尽に苦しむことが少しでも、減らすことができればよい」
	LSWの対象者	<知りたい人には教えてあげた方がいい><知りたい人は知ればいい>
	もやもやをなくす	<しんどい内容もあると思うが、そこを乗り越えると、もやもやしたものがなくなるかもしれない><事実を知らないまま、もやもやした状態にいるよりは良いことだ>
	子どもへのかかわり方の変化	「LSWの勉強をして、する前と勉強した後で、子どものかかわり方が変わった」「家の話や、過去の話は子どもとはしにくい思いがあったが、今はそういう話をするには、子どもがしているんだと思う環境をつくるためにも大切だと思う」「過去に触れてはいけないと大人が思っているのは、子どももそう思い、自己否定に繋がってしまう恐れもある」
学生の自己覚知ができる	自我の発達してきた時期	「自我が発達してきた大学生だから受け止められることもあると思うので、その時期の実施はいい」「社会に出る一歩手前の時期であるとともに、成人して自我も発達し、社会的にも心理的にも自立していく時期」

学生の自己覚 知ができる	自分の過去の振り返り	『自分自身の過去を振り返るという意味でもよい経験となる』『自分の置かれた環境を振り返ることで自分とは何かを再確認もしくは確立して、社会に出ていける』『学生が今までの生い立ちを知り、そして、この勉強をすると良いものになる』『時間もかかると思いますが、今まで生きてきたことがどれだけ大切かを学ぶことが必要だ』『自分自身と向き合う』『自分が何者なのか知る』ということの大切さをしてもらう』『学生自身も、‘自分とは何か’ということを考えるきっかけになる』<年齢が上がるほど、振り返ることも少なくなっている><自分の生い立ちを整理できるので賛成><社会に出ていく前に自分のことを少しでも多く知っておいた方がよいと思うので賛成>
	感情がわかる	<自分が経験していないことや、思ったこともない感情がわかったり><今まで向き合えなかったことに向き合える機会だ>
	ワークをする	『自分自身（学生さん）のライフストーリーブックを作るというのもよい』『ワークを自分でしてみる機会』『いくつかのワークを体感してもらった。大変手ごたえがあった』
	方法の工夫	『視点をどこに当てるかや、目標をどこに定めるかによっても違うのだろうが、大概意義がある』『現場の職員や関係機関とチームとなって子どものことを考える視点、授業ではグループ討論のまた違った視点で行うことができる』『子どもの視点と親も含めた視点、色々な想定ができる』<取り入れることについて無理のないようにすれば、授業の一つとしてもよい>

Table3-2 大学（院）教育に LSW を取り入れることの懸念

カテゴリー	コード	データ 学生< >、院生「 」、現場職員「 」
個人情報の取り扱い	個人情報が雑にならないか	『長期的な授業（前期、後期など）で取り入れると、名前を伏せて、匿名の場合であっても、大切な個人情報であるため、雑に扱われかねない』『個人情報が雑に扱われるのに、つながる』<学生内に養護施設と関わりのある学生がいるかもしれないから、慎重に行うべき>
受講対象者を限定すべき	将来の進路が決まっていなくて安易な取り組みになる	『院生に対して行うのは良いと考えますが（将来、臨床心理士になりたいという意思が固まっているため）学部生に対しては、まだ将来の事について具体的に決まっていな方だと、安易な気持ちで取り組んでしまうかな』『全く関係のない学科だと取り入れる必要はない』
	受講対象者の限定が必要	『施設希望の学生が通っている大学や学科なら、取り入れることも必要』『特別学期や共通教育科目などで、関心のある方に対して行うのも良い』<反対の人もいると思うので、授業に取り入れるというよりは、学内希望者対象にするべきだ>
慎重さが必要	過去に触れたくない人やストレスを感じる人がいる	<過去を気にしている人、触れてほしくない人もいだろうから、やるなら慎重になるべき><様々な家庭環境の人がいるので、少しどうだろう><辛い人もいると思う><ストレスを感じる人もいかもしれないということを慎重に考慮して、取り入れる必要><LSWで学ぶことによってつらさにくじけてしまうのでは>
効果への疑問	前向きになれるのか疑問	<本当に前向きになれるのかという疑問がある>『授業と現実起こる事には、違いがあるので難しいこともあるのではないのでしょうか』<この1回ではわかりません>

Figure1 大学（院）教育に LSW をとり入れる意義と懸念

